

1871年八瑤灣琉球人事件 140年歷史與還原國際學術研討會

1871年八瑤灣琉球人事件140年の歴史と復元・国際シンポジウム
International Symposium on the Padriyur Bay Incident in 1871 and on the
Reconstruction of Its History

文 | 傅琪貽 (政治大學日本語文學系教授)

1871年11月初琉球國宮古島の年貢船、從首里歸回途中遇到大風而漂流到東台灣八瑤灣。一行66人登陸後誤闖排灣族的部落，先獲飲食與住宿的保護，但後產生嚴重的誤解，演變成排灣族殺害琉球人的「牡丹社事件」。



1871年11月初琉球國宮古島の年貢船は首里からの帰途、シケに遭って東部台湾の八瑤灣に漂着した。一行66人は上陸後、誤って排灣族の部落に進入し、飲食と宿の保護を受けたが、誤解から排灣族によって殺害されるという「牡丹社事件」が発生した。

140年歷史與還原 富強烈地方色彩

2011年是「牡丹社事件」140週年，總策劃人國立台北教育大學楊孟哲教授，訂於11月24-26日在屏東縣召開了「1871年八瑤灣琉球人事件140年歷史與還原國際學術研討會」系列活動，邀請國內外學者及各界代表，檢討真

140年の歴史と復元 豊富で強烈な地方色

2011年は「牡丹社事件」140週年にあたり、國立台北教育大學楊孟哲教授の企画で、11月24日から26日屏東縣で「1871年八瑤灣琉球人事件140周年歴史の真相を還原する」國際學術研討會が举行された。内外学者と各界代



拜訪楊公友旺家，三位歷史人物代表齊聚楊氏祠堂，左起為野原耕榮、楊信德、華阿財。
(圖片提供：傅琪胎)



帶領所有參與學者、貴賓及學生等，於琉球人五十四名墓前一起牽起雙手高呼「愛與和平」，象徵化解140年來的誤解與仇恨。
(圖片提供：楊孟哲)

相，尋找化解百年歷史遺憾。因主題鎖定「1871年」、「八瑤灣（排灣族）」、「琉球人（遇難）事件」，與一般1874年日軍登陸為主題的「牡丹社事件」不同，是富有強烈地方事件議題之研討會色彩。

11月23日琉球代表抵達台灣後，在台北的文化建設委員會召開記者會，特別邀約琉球遺族代表和排灣族牡丹社後裔，及當時搶救琉球12人的客家人楊友旺後裔，提倡「大和解」。接著25日，與會學者等從國內外趕來加入一行人後，約60人重回事件發生的歷史現場，並到屏東縣車城鄉統埔村的琉球54人遺體被埋葬的「墓」前舉行一次慰靈儀式，琉球宮古島遺族代表野原耕榮先生現場獻上琉球拳，場面極為

表を一同に、琉球処分と台湾割讓の起点になる殺害事件から真相を究明する努力がなされた。主題が「1871年」「八瑤灣（排灣族）」「琉球人（遇難）事件」等極めて地方史的課題に絞られていて、日軍の登陸と外交交渉を焦点とする1874年「牡丹社事件」とは大いに違っていた。

11月23日琉球代表一行の到着を待つ、台北では文化建設委員會で記者会見があった。被害者琉球遺囑の代表と加害者排灣族牡丹社の代表、及び事件発生当時琉球12人を救助した客家人楊友旺の遺族が出席して、「和解」が提唱された。25日には約60人の學者学生等が加わり、事件發生の歴史現場を探索した。統埔村にある琉球54人の遺體が埋葬されてい



又吉盛清教授準備大量精采考證史料內容於會議上發表。(圖片提供：林雨佑)

哀榮；後一行人趕往車城祭拜楊友旺「答謝救命之恩」儀式。可說，當天的活動充滿了後代家屬期盼為140年前的歷史傷痕，欲完成療傷與「大和解」的意涵。

國際學術研討會

26日在海生館國際會議廳舉行「1871年八瑤灣琉球人事件140年歷史與還原國際學術研討會」，由監察委員黃煌雄主持開幕式，引言人琉球受難遺族代表野原先生報告「宮古島人八瑤灣事件始末」，藉以宮古島野原村後代繁衍情形，表示克服悲痛的經歷。接著，由台北教育大學教授楊孟哲主持，由引言人排灣族牡丹社後代代表牡丹國小教師高加馨報告，與談人

的「墓」前での慰靈祭では、宮古島遺囑代表の野原耕榮さんが琉球拳を献上された。その後で車城に向かい「恩人」楊友旺の位牌の前で感謝の儀式をした。当日は各遺族代表による歴史の傷痕を乗り越える「大和解」で終了した。

國際學術研討會

26日は海生館國際會議廳で「1871年八瑤灣琉球人事件140周年歴史の真相を還原する」國際學術研討會が開催された。監察委員黃煌雄が開幕式を主催し、琉球人遭難遺囑の代表野原さんの「宮古島人八瑤灣事件始末」の報告で、宮古野原村の子孫繁栄の状況報告が、悲しみを乗り越える遺族の努力として語られ

分別由宮古島市綜合博物館研究員久具弥嗣、石垣島文化研究者石堂德一、琉球大學教育文化研究所教授里井洋一、韓國暎園大學亞西亞文化研究所教授崔在濬擔任。

下午由政治大學民族學系教授林修澈主持，引言人沖繩大學地域研究所教授又吉盛清報告有關墓碑顯示的歷史意義，與談人分別由神戶大學教授王智新、屏東教育大學教授陳枝烈、排灣族前牡丹社鄉長華阿財、政治大學日文系教授傅琪貽、台北教育大學藝術與造型設計系教授劉得紹擔任。最後綜合座談由監察委員黃煌雄擔任，分別由又吉盛清、王智新、崔在濬、華阿財、傅琪貽以及楊孟哲等發言。

た。次に台北教育大學教授楊孟哲の司会で排灣族牡丹社の代表牡丹國小教師高加馨から報告があり、宮古島市綜合博物館研究員久具弥嗣、石垣島文化研究者石堂德一、琉球大學教育文化研究所教授里井洋一、韓國暎園大學亞西亞文化研究所教授崔在濬がそれに答えた。午後は政治大學民族學系教授林修澈の司会で沖繩大學地域研究所教授又吉盛清が事件に關与する墓碑の歴史的意義を述べ、神戶大學教授王智新、屏東教育大學教授陳枝烈、排灣族前牡丹社鄉長華阿財、政治大學日文系教授傅琪貽、台北教育大學藝術與造型設計系教授劉得紹がそれに答えた。最後の綜合座談会は監察委員黃煌雄の司会により、又吉盛清、王智新、崔在濬、華阿財、傅琪貽及び楊孟哲等が發言した。



研討會總策劃楊孟哲教授（右）及排灣族牡丹社後代高加馨老師。
（圖片提供：林雨佑）

參訪牡丹社事件紀念公園，對於琉球人攜道具上岸一事，引發「道具」是否包含「武器」的熱烈討論。

（圖片提供：林雨佑）



歷史傷痕 仍待撫平

在此系列會議中，最有意義的是牡丹國小高年級學生穿上排灣族的服飾，表演「1874年印象牡丹」，藉以現代舞蹈詮釋：族群相遇、誤解與衝突後達到愛與和平的普世價值境界。

然主題「1871年八瑤灣琉球人（遇害）事件」，是雙方尚未深入研究的地方史領域。在歷史解釋上雙方已達成原因為「誤解」、「語言不通」、「文化差異」與「恐慌」等有多重原因而產生。但對琉球人來說，遭排灣族殺害的史實、經過、動機等尚未獲得合理證據前仍舊無法釋懷。事隔140年前的歷史傷痕，仍未撫平，待後人努力。◆

歷史的傷跡 未だに癒えず

この度の系列シンポジウムで一番意義深かったのは、牡丹國民小学校五、六年級生が排灣族の服飾を纏って踊った「1874年イメージ牡丹」で、現代舞蹈の形で異民族の出会い、誤解と衝突、そして愛と和平に至る過程を克明に抉り出したことである。

しかし「1871年八瑤灣琉球人（遇害）事件」の地方史解明がまだ不十分で今後の研究の深化が待たれよう。歴史解釋上では殺害事件が「誤解」「語言不通」「文化的差異」と「恐怖」等重複する原因で発生したと合意が得られても、琉球側には殺害事実や經過、動機などいまだ不可解な謎が残る。140年前の歴史の傷痕が癒されるには各界の努力が必要だ。◆

與會人員於研討會後合影。（圖片提供：傅琪貽）



研討會花絮 エピソード

尼乃 (tjaljunai) 社少女的故事

1874年5日日軍登陸南台，6月1日兵分南中北三路，發動武力征服，所到之處燒毀部落。其中一支北軍則繞道風港，翻越丹路山，即入尼乃社及中社 (tjakadarkudral) 後，即由北向南直入牡丹社 (sin vaudjan)。日軍行軍中擄捉到一名少女，被倒到龜山日軍指揮部，由西鄉從道命名為「御台 (o-tai)」後，被帶回東京，讓她學習日式生活起居與簡單日語的問候語等。約4個月後，因日軍要撤退，所以又把少女送回尼乃部落。西鄉吩咐少女，要回部落後過日式文明生活，並要教導部落民向上提升。

然日本人是入侵部落、毀滅家園的仇敵，怎能當作學習對象？該少女經過日本人調教之後，裝扮與談吐模樣已略帶日式風味，當然遭受很大的排擠，甚至於直接被挨罵。因為部落人誤解為少女已經被日本人利用，這使少女陷入嚴重的憂鬱與矛盾。於是少女白天離開部落，山間閒走，流離林野，然在日夜苦惱幾個月後，終究選擇消失群眾，無人知曉她的去向。有一天，其小小遺體被人發現在尼乃山中時，死亡已久。

該少女不幸的故事，對日軍來說或許是一種日本文化移植海外的實驗實例；但是對被日軍打敗不久的排灣族人來說，是一種污辱的行為。牡丹社頭目父子的頭顱被日軍帶走的排灣族人，怎能接受該少女？在少女身上所見到的征服者日本的一切，絕對無法容納。無辜的少女面對族人的斥責怒罵時，心中充滿了疑問：這一切難道是我的錯？我到底犯了甚麼天大的罪？這可憐的少女是在「牡丹社事件」中的另類受害者。

ニーナ (tjaljunai) 社少女の話

1874年5月日本軍が南台湾に登陸した後、6月1日ついに南中北三方面に分かれて、武力制圧を發動し、至る所全ての部落を焼払った。北軍は風港から兵を起し、丹路山を越えてニーナ社と中社 (tjakadarkudral) を経て、北から南に向かい目的の牡丹社 (sin vaudjan) に入った。北軍は行軍中、一名少女を捕らえて、龜山に置いた日軍指揮部に連れて行った。司令官西郷從道は「御台 (o-tai)」と命名して東京に連れて行き、日本式生活や簡単な日本語の挨拶言葉などを学習させた。ところが四ヶ月ほどして、日本軍が撤退することとなったので少女をニーナ部落に連れ戻した。別れに際して西郷はこの少女に部落に戻っても日本式な文明の生活を送り、部落民を文明的に向上させるようにと命じた。

しかしパイワン族にとって日本人は部落に侵入して、家屋など一切奪った仇敵である。これをどうして学習の対象にできようか。少女は日本人の世話になった後、話振りや身振りなど様子が日本人らしく見えた。當然のこと部落の人々から排斥を受け、果てには面と向かって罵られりした。部落の人達は少女が日本人に利用されていると誤解したらしい。結局少女は深刻な矛盾と憂鬱状態に陥った。少女は昼間は部落を離れて、山間原野を当所も無く歩き回り、日夜苦惱に嘆いた後、幾月かしてとうとう群眾から姿を消した。誰も少女の行方を知るものは無かった。しばらくして小さな遺體がニーナ山で發現された。

この少女の不幸な境遇は、日本軍からは日本文化を海外に移植実験した実例とはなるが、日本軍に敗れたパイワン族の人達からは汚点を映る。牡丹社は頭目父子の頭顱を日本軍に持ち去られている。少女の姿には征服者日本が凝縮されている。しかし無垢な少女には、自分がなぜ部落の人々からあんなにも罵られ排斥される理由が分からない。自分のどこがなぜ間違っているのかが分かりようがない。可哀想な少女は「牡丹社事件」のもう一人の被害者である。